みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Bulgaria : an ethnological travelogue

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 九祚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004612

れ，腹痛，皮膚病，眼病などの薬用に用いられる。ふつう 10 kg のバラの花から 10 l のバラ水が蒸溜された。

前記の第1，第2のびんの液体はもう1度蒸溜される。ふつう4びんのバシュと4びんのアヤクを入れて約2時間蒸溜し，約5 l の水を得る。この水はスリヤ Сурия とよばれる。スリヤを約1時間静止しておくと，表面に 2–4 cm のバラ油の層ができる。これをムスカル Мускал とよばれる小容器に集めて市場に出すのである。バラ油を採取した残りのバラ水は飲用に供せられ，蒸溜後のバラの花は家畜の飼料またはバラ畑の肥料にされた。ただし，バラの花が2度蒸溜されることもあったが，この場合には 12–13 kg の新しい花を加えるのがふつうであった。

ブルガリアのバラ油の産額は現在年間 2,800–3,000 kg，1960年代の初め世界総産額の33%を占め，国別に見ると世界第1位であった。第2位フランス，第3位アメリカ，第4位トルコ，第5位ソ連（コーカサス）。値段は1970年度の場合 1 kg あたり8,000レフ。もちろん輸出も多く，外貨獲得で重要な役割を果している。

バラ油の蒸溜工場は今では協同組合化され，バラの花を民間から買い上げる形で運営されている。蒸溜法も原理は以前と同じであっても，設備は近代化されている。ブルガリア航空の機内では，カルロボ製のバラ油をしみこませた紙製手ふきがくばられた。芳香だけでなく，皮膚もつややかになるとのことであった。なおカルロボのバラ油工場の内部は，希望したけれども見せてもらえなかった。ただ，いかにも工場らしい建物にそぐわない，ふくよかなバラの香水の匂いがあたりにたちこめていた。

6月2日　晴　午前中プロウディフで，19世紀前半に建築された商人たちの豪邸をいくつも見て歩いた。今は一部が修復され，国の文化財として指定されている。ほとんどがシンメトリカルなプランの2-3階建てで，いずれも客間がとくに華麗に仕上げられていた。構造上のもうひとつの特徴は，エルケル эркер とよばれる出っ張りによって，2階は1階よりも，3階は2階よりも面積の広い場合が少なくなかったことである。商人ネドコウィチ Недкович の家，フランスの詩人ラマルティヌが1833年に宿泊したマウリディ Мавриди の家，ゲオルギアデ

写真10　カルロボのバラ油工場

ィ Георгиади の家など10軒くらいあった。しかしこれらの住宅は，やはりブルガリア全体から見れば例外的な豪邸と言うべきであろう。

一般にブルガリアの民家建築はバルカン半島の他の諸民族の場合とほぼ同じであるといわれる。幅 1–1.2 m になるように木材で骨組をつくり，その間を細枝，煉瓦，板あるいは石で埋めて，上からもみがらのまじった粘土を塗って壁面がつくってある。表面が石灰で白く塗られる場合も少くない。

午後2時10分の飛行機でワルナへ向かい，3時に到着した。旅行中，ブルガリア各地で建設中の工場や住宅団地を多数見かけたが，ワルナ空港から市内へ入る途中でも同じ光景に出会った。

6月3日　ワルナ　曇　ワルナは黒海沿岸の保養都市。街路樹が多く，空にはカモメがとびかっている。海からの風がわりあい涼しい。ホテルと海辺との距離は 300 m ほどにすぎないが，ボダイジュなどの樹木がうっそうと茂っている。砂浜にコンクリート2階建の脱衣場がある。細かくてきれいな砂だ。カモメは生れたての赤んぼうの泣き声のような奇声をあげ，ときおり白い糞を通行人の頭にふりかける。

私たちは海岸に近いホテルの3階に泊ったが，右手に長く突出した岬と沖に碇泊している数隻の船がながめられた。

ワルナの最初の住民はやはりトラキア人であった。前4世紀ギリシア人が侵入し，この町をオデッソスと名づけた。その後ローマの支配下に入ったが，当時の遺物としては大きな浴場（2世紀後半）の廃墟が残っている。これは方形の面積 7,000 m² の煉瓦建で，男性用と女性用の2部分にシンメトリカルに分れている。またワルナの考古学博物館にもトラキア・ローマ時代の遺物が多数展示されている。

ワルナ市の民族学博物館は3階に分れ，1階には農具，ブドウ酒醸造用の道具一式，漁具など，2階には衣服，3階は現代都市における家具や炊事用具が展示されていた。館長はニコロワ Мария Николова さん。

博物館の見学を終って後，市街から少しはなれた海岸にある保養地ゾロトエ・ペスキ（黄金の砂の意）までタクシーをとばした。その名の通り，ここの砂は金色であった。その途中アラジャ Алажа（まだらの意）とよばれる古代の洞窟修道院の跡を訪れた。石灰の断崖にトンネルが堀られてあったが，今から100年く

写真11　前4世紀のテラコッタ。ワルナ博物館

らい前まではまだ壁画が残っていたという。

〔ワルナ遺宝〕

アラジャ洞窟の真下の半地下室風に建てられた特別陳列館で，1972-75年にワルナ郊外で発見されたトラキア以前の黄金遺宝を見学した。説明者のメラメド Андрей Меламед 氏の話と，ソ連の考古学者チェルヌィフ Черных の論文によって概略をのべるとつぎの通りである。これは工場建設の敷地内，地下 65-310 cm のところで発見され多くはケノタウフ墓（死者の遺体のない墓）の副葬品であった。年代比定のきめ手はないが，別の場所からの発掘品と比較検討の結果，今から5000-6000年前のものであることは疑いないという。いずれにしても，ある一つの古代民族に属する文化で，類似文化はバルカン半島北東部の前4000年期の集落址や墓地からの発掘品によって知られていた。しかしこれほど大量の黄金遺物が一度に発見されたのははじめてであり，ヨーロッパの古代文明に新しい問題を投げかけるものとしてセンセーションをまきおこした。

1975年までに61の墓が発掘調査された。その結果，墓には2つのタイプのあることが判明した。1つはふつうの兵士らしい遺体をともなうもの。これは40墓。もう1つは人骨をともなわないシンボリックな埋葬で，考古学でケノタウフ墓とよばれている。これは21墓を数えた。このケノタウフ墓こそはワルナ遺宝の謎をなすもので，黄金遺物（1840点，約 4.5 kg）もほとんどこの墓に集中していた。墓はふつうの地下墓で，多くの土器，袋穂式の石斧，フリントのナイフ，剝片，銅斧，大針のほか，黄金製品では腕輪，垂飾，飾板，牛や羊の小像が注目された。3つの墓の場合には，人骨なしで，額，目，口の位置に黄金の飾板がおかれ，男性のシンボルの位置には，それをかたどった金箔の細長いものがおかれてあった。人骨をともなって，しかも副葬品の豊かな墓は1974年末に発掘された1つだけで，遺体は40-45歳の男子であった。この副葬品は，人骨をともなわない第4号墓に酷似していた。

副葬品に含まれる貝類には地中海産の

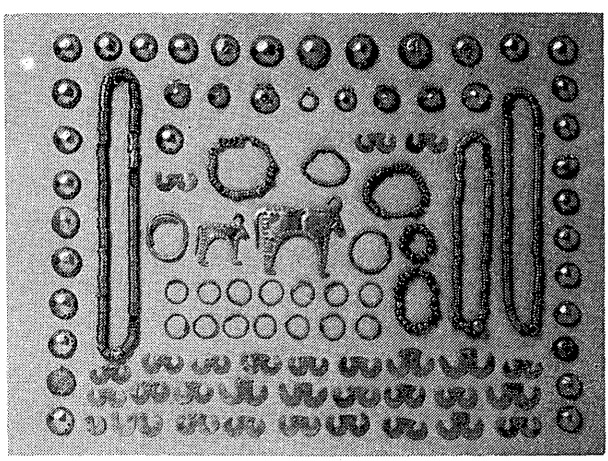

写真12　ワルナ遺宝の一部

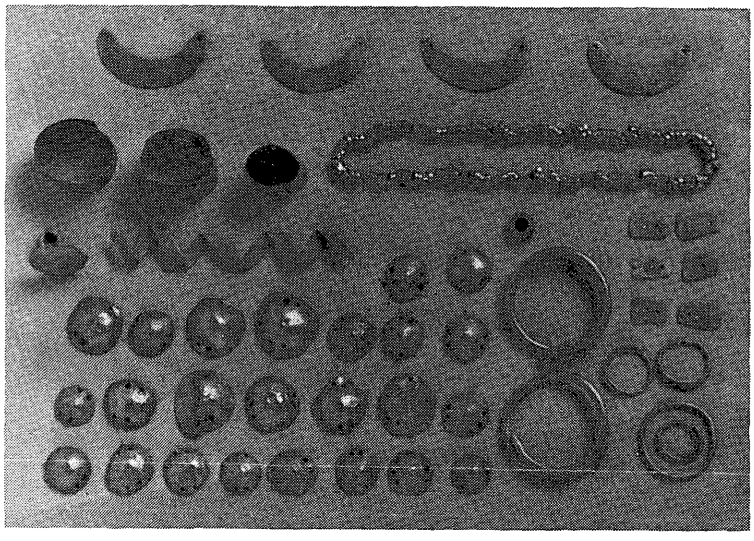

写真13　ワルナ遺宝の一部

ものも多く，土器は埋葬のために特別に作られたもので，よく装飾され，金粉の塗られているものも少なくなかった。なかには粘土のマスクをつくり，その上に黄金製の飾りをつけたものもあった。発掘調査にブルガリアの専門家とともに参加したソ連の考古学者チェルヌィフは，この文化の担い手が現地に住んだ農耕民（家畜も飼養していた）で，グメリニツァ Гумельница 文化，あるいはカラノボ Караново Ⅵ 文化，さらにはコジャデルメン Коджадермен 文化と称している。

6月4日，5日　晴　ワルナから汽車で古都ティルノボへ向かう。鉄道の沿線には，まっ赤なケシの見事な群落が点在し，白いアカシアの花も目を楽しませた。車中で1人前70ストチンキ（約280円）のサンドウィッチを食べながら，案内のネディさんの話をきいた。彼女の父親は75歳，もと会計検査官であった。母親はもと教師で73歳。いずれも今は年金生活者としてバラ油で有名なカザンルィク市に住んでいる。ほかにシプカという町に別荘もある。ネディさんは私たちを両親の家に案内したがったが，今回はいかにも時間がなかった。

ゴルナ・オリャフウィツァという駅で汽車を降り，ティルノボ行のバスに乗り換えたが，どういうわけかバスがひどい混雑で，もう少しでトランクを持ったままふり落されるところであった。

ティルノボはヤントラ Янтра 川沿いに発達した城下町で，市街はツァレベツ Царевец，トラペジツァ Трапезица，スベタ・ゴラ Света гора などの丘の斜面に築かれている。このあたりには旧石器時代からの遺物が発見されており，住みよい場所を選ぶ人間の眼は昔も今も変らないことを示している。ツァレベツ丘ではブルガリアの第1国家期(681-1118年)の遺跡が発見された。

しかし，ティルノボの全盛期は1186年からオスマン・トルコの侵入（1393年）

までで，ブルガリアの建築・美術の中心であった。この時期は，ブルガリアのいわゆる第2国家期に相当する。

ブルガリアの第2国家期は，ビザンツの長期にわたる支配からの離脱にはじまるが，その先頭を切ったのはティルノボであった。アセン2世（1218-1241年）のとき，ヨーロッパ南東部における最強の国家として勢威を誇るが，その死後イワイロという豚飼いの指導する反乱によってコンスタンチン・アセン王は殺され，イワイロはティルノボ王城に入り，先王の妃マリアと結婚，王位を奪った。

現在，ティルノボのツァレベッツ丘に修復されつつある王城をはじめとする多くの遺跡は，ほとんどがこの第2国家期のものである。しかし，19世紀初頭の，いわゆる「ブルガリア・ルネッサンス」期には民家建築が盛んになった。現在ワロシャ Вароша 丘の急斜面に軒をつらねる見事な町なみはこの時代に属する。狭い通りを広くするために工夫されたエルケル，石畳の坂道，ヤントラ川の断崖をそのまま利用した幾重にも重なる屋根など，ティルノボ独特の景観である。夜ともなると，家々の灯がヤントラ川に影って一段と興趣をそえる。

ティルノボでは郷土史博物館，キャラバン・サライ（1858年フィチェフ Николой Фичев によって建設された），聖コンスタンチンとエレナ教会（1872-73年建），ティルノボ城などを見学した。キャラバン・サライはハン хан ともよばれ，19世紀のホテルともいうべきもので，テラスつきの石造3階建，2階にはアーチ型の列柱がならんでいた。今では民族学博物館になっており，皮革，板金，彫金，鍛冶などの職場が道具をそろえて展示されてあった。

衣服も豊富であった。ここでブルガリアの衣服について一言しよう。同行のネディさんは衣服や刺繍についてもくわしく，ソフィア大学で民族学の講義をしているとのことであった。以下は主として

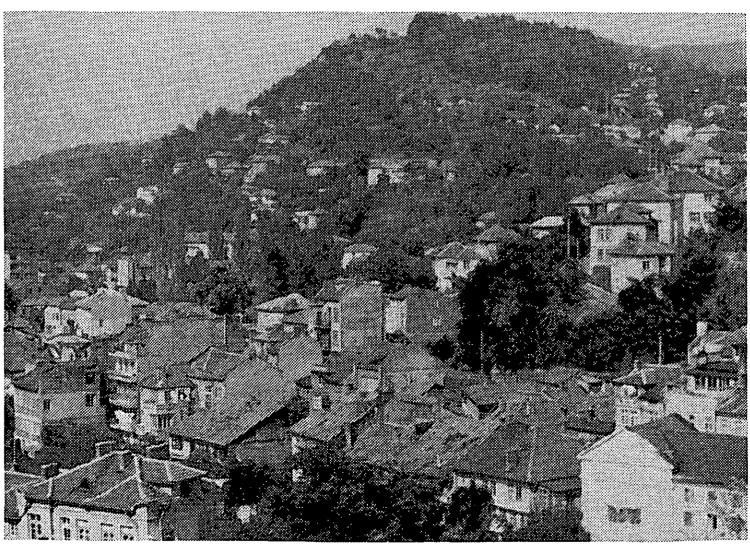

写真14　ティルノボの市街

ネディさんの話によったものである。なおソフィアの博物館にはブルガリア全土の衣服がタイプ別に展示されている。

〔ブルガリアの衣服〕

19世紀末までのブルガリアでは，衣服はふつう家庭でつくられた。19世紀末から20世紀初頭にかけて工場製の衣服が日常生活に浸透しはじめ，伝統的な衣服は急速にすたれはじめた。

ブルガリアの女性の伝統的衣服は，ワンピースの上に着るものによってつぎのように分けられる。第1は，前掛（エプロン，ブルガリア語でпрестилка）のような布地（たいてい毛織物）を前と後にウェストで結びつける衣服で，ドブプレスチルチェノ Двупрестилчено とよばれ，主として北部のドナウ川流域に広まっていた。この場合，後側の布地は前側のものより広かった。前側の布地はせまい代りに，色が鮮かで，豊かに装飾されていた。後方の布地には，ひだをつけることが多かった。ワンピースの胸，袖，裾は刺繍で飾られていた。このタイプはルーマニア，ウクライナ，南ロシアのものによく似ているという。

第2はスクマン Сукман とよばれるもので，ブルガリアの典型的な女性衣服であり，国の中央部に広まっていた。スクマンとは青地または黒地の毛織物でつくられた一種の袖なし(あっても短かい)のことで，チューニック風の裁ち方が多

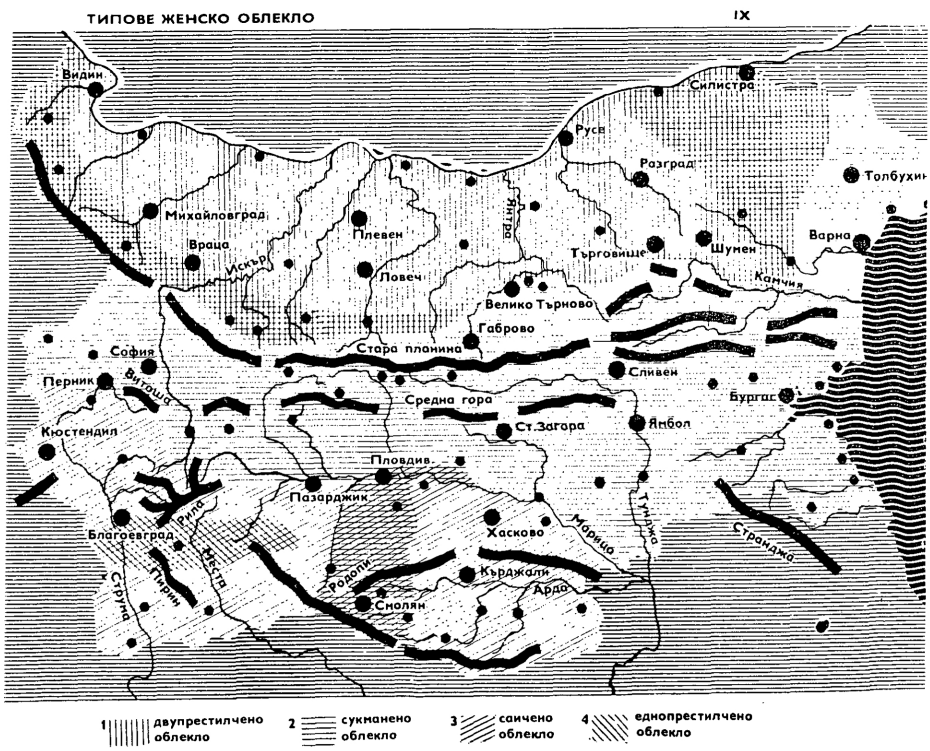

図1　ブルガリア女性の伝統的衣服のタイプ別分布（ワカレルスキによる)。

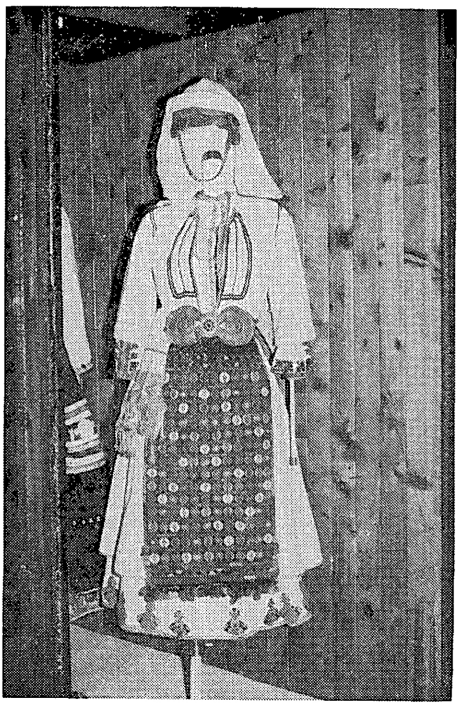

写真15　エドノプレスチルチェノ型の花嫁衣裳。クシャクに注意

かった。裾は刺繍やアプリケで装飾された。ふつう，チューニック風のワンピース，毛織物の帯，鮮かな色彩の前掛といっしょに着ることが多かった。

第3はサイチェノ Сайчено で，前開きのボタンや留め金のないジャケット様の上っ張りである。袖は長袖あるいは短袖である。この場合のワンピースはスクマンの場合とほとんど同じであった。このタイプはブルガリアの南西部および南部に分布している。

第4はエドノプレスチルチェノ Едно-престилчено，ワンピースの上に前掛1枚のタイプである。このタイプの分布地域はせまく，南西部の一部に限られた。女性の晴着にはクシャク Кушак とよばれる大きな金属製飾板をウェストの前部(腹)につける。銀または銅製が多く，鋳こんだもの，たたき出したもの，細い銀線で細工したものなどの種類があった。私たちはブルガリアの多くの博物館や修道院で見事な細工のクシャクを多数見ることができた。

男性の衣服は，女性のものに比べると，博物館でもたいへん少なかった。実際に着ている人に出会ったのは，旅行中を通じてただひとりであった。伝統的な男性の衣服は，色彩と裁断法を異にする2つのタイプに分かれた。1つは白地の羅紗でつくられたズボンで，主として西部に広まっていた。もう1つは青，黒，茶色の布地で，腰以下は細く，腰まわりはゆったりしていた。このタイプは主として東部および南部に広まっていた。腰にはいずれの場合も幅の広い赤その他の布地

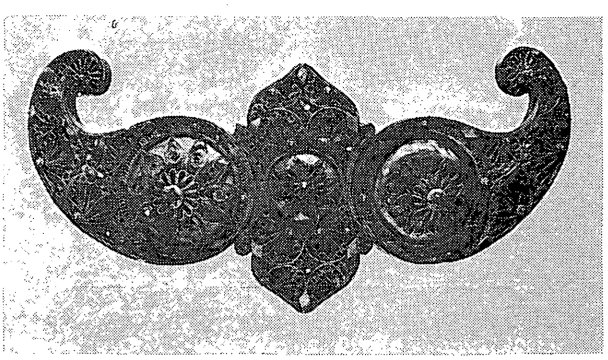

写真16　銀線でつくられたクシャク